

ハワイ日米キネマにみる戦後ホノルルの日本映画上映

権藤 千恵 (本学政策科学研究科博士課程後期課程)
E-MAIL psg01996@sps.ritsumeai.ac.jp

1. はじめに

1891年にエジソンのキネトスコープがハワイに伝えられたのが、ハワイにおける最初の映画上映であるといわれている⁽¹⁾。ジャック・Y.田坂によれば、1904年に上映された日露戦争のフィルムがホノルル在住の日本人に向けた最初の映画興行で、1910年代にはハワイの興行師たちによって日本から本格的な輸入が行われるようになったという⁽²⁾。

1920年代後半にはロスアンゼルスに本社を置いていた日米興行をはじめ、ハワイでも数社のエージェントが日本映画の買い付けにあっていた。1930年代の後半には、ニュース映画を中心に年間300本から400本の映画フィルムがハワイへ輸出されていたことが表1からもわかる。ハワイでの日本映画の上映は1941年12月の真珠湾攻撃以降終戦まで禁止され、映画フィルムの大半もFBIによって接收されていたが、1946年に当時接收を免れていた無声映画フィルムを上映することで再開された。無声映画の復活と同時に、ホノルルで活躍していた弁士たちも再び劇場の舞台に立つこととなり、多くの観客をよるこぼせた。本田緑川の『さよなら電車』に戦後も弁士として活躍した高守秋月という人物について以下が述べられている。

「その高守さんの長い興行生活の中で、本当に花を咲かせたのは第二次世界大戦後の古い日本のもの無声映画、つまり活動写真であったというのだから面白い。戦後に弁士活動写真が歓迎されたなど、全くウソのような幸運の実話である⁽³⁾。」

1947年8月に日本の民間貿易が復活したことから日本映画の輸出も再開され、戦前から日本映画の輸入を手がけていたハワイの各エージェントも輸

入交渉を再開した。1950年代に入ると、大手映画会社が海外市場の進出対策を行うようになった。ホノルルでは松竹が1954年6月に日本劇場を獲得し、東映は、ホノルルの合同娯楽会社、国際興業と契約している⁽⁴⁾。同様に大映も1955年3月に75%現地法人の太平洋映画会社と共同で、国際劇場を常設館として獲得している⁽⁵⁾。

さらに、1958年に通産省から発行された『日本映画産業白書』によれば「戦後、貿易が再開された昭和22年当時においては日本映画はアメリカが唯一の市場であったが、これもアメリカの一般客を対象にしたものではなく、ハワイ、カリフォルニア、その他2, 3の地区に在住する1世および2世の観客を対象としたものに過ぎなかった⁽⁶⁾」とある。

一方で、ハワイへ送られた多くの日本映画作品は1950年代に入ってから現地で英語字幕がつけられ、ハワイに住むローカルの人々を観客層に採り入れることに成功した。1900年代から日本人街として発展したホノルルダウントOWN地区は、1950年代には日本の大手映画会社による現地法人、あるいは支社の拠点となり、一大市場として発展するに至った。

このような背景には、ホノルルのエージェントが日本映画の輸入、上映だけではなく、芸能人の招聘、ハワイロケへの協力なども積極的に行い、同時にホノルルのローカル層(観客層)へも行き届いたサービスを提供していたことが考えられる。

本報告では、1950年代から70年代を中心に映画興行師として活躍した木村宗雄と、彼が経営していたハワイ日米キネマの活動を通してホノルルの日本映画文化の足跡を紹介し(2-6章)さらに、戦後ホノルルにおける日本映画文化の隆盛についての考察を行う(7-9章)。

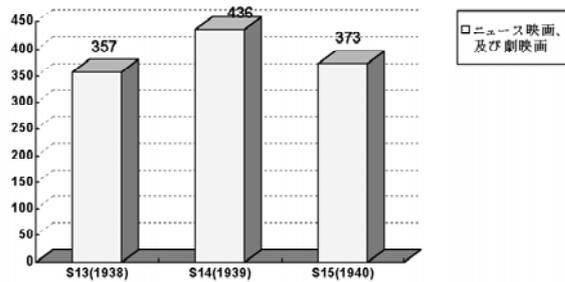


表1:戦前の日本映画輸出数(ハワイのみ)
参考:『映画産業白書』通商産業省企業局商務課
1959年 38ページ。

2. 木村宗雄とハワイ日米キネマについて

木村宗雄(本名:宗一)は、1886(明治19)年に現在の山口県岩国市に生まれた。子供の頃から芝居が好きで、地元の素人芝居に参加していたという。1903年、16才の時に芝居に明け暮れる木村を心配した両親が姉夫婦のいるハワイへ木村を自由渡航させたのが彼の人生の契機となった。ハワイへ来てからも木村の芝居好きは変わることがなく、ハワイで旗揚げされた新派劇団の旭団、大正会などに参加し、ハワイ各島を巡業した後、第一次大戦後に晴友会を結成。米本土やカナダへも遠征している⁽⁷⁾。1926年ごろから、ハワイの日本映画エージェントのひとつだった沢村作市の経営する沢村商会に参加し、アメリカ本土を中心に弁士としても活躍していた。ロスアンジェルス⁽⁸⁾の富士館で弁士を務めていたことが当時の『羅府新報』の広告からわかっている⁽⁹⁾。木村宗雄は日米キネマに参加して以降、戦争中に米本土に抑留されている際にも映画の上映に携わり、1976年に90歳で引退するまで約70年にわたって芸能人の招聘、日本映画館の経営に力を注いだ。1963年には日本映画の海外進出に尽くした業績が認められ、藍授褒章を受勲している⁽¹⁰⁾。晩年は腰を悪くし、車椅子の生活を送っていたが、1983年5月30日に98歳で亡くなるまで、相撲の見物に日本へ行くことを楽しみに、穏やかな生活を送っていた⁽¹¹⁾。

日米キネマは1931年頃からロスアンジェルスを本社に置き、日本映画の輸入、芸術家の海外紹介



写真1:役者時代の木村宗雄(提供:木村ヨシエ氏)

等を手がけていたエージェントである。日米キネマの本社は羅府(ロスアンジェルス)で、創業は昭和5年とされるが、実際の創業時期ははっきりしない。昭和16年度版「映画年鑑」の「日米キネマ株式会社日本支社」の項目に木村宗雄の名前をみることができる⁽¹²⁾。1947年に民間貿易が再開されて以降は東宝、大映など日本の映画会社が海外進出をすると同時に、これまでアメリカで日本映画の輸入を手がけていた役員がそれぞれの法人に移った。このことから、日米キネマは1950年代に事実上消滅している。以上のことから、日米キネマという法人名は戦後数年の間使われていたものと考えられる。一方で、ハワイでは木村宗雄は日米キネマのハワイ支店長としてホノルルではよく知られており、新聞記事には時折「日米キネマ」という名称が用いられている。

3. ホノルルの日本映画常設館とベレタニア館

ホノルルの日本映画館は、1920年頃から次々と当時日本人が多く住んでいた現在のダウンタウン

地区を中心に建てられた。西にチャイナタウン、東にオフィスが建ち並ぶホノルルのダウンタウン地区は、1960年代まで日本人街として劇場だけでなく日系人が経営する商店や旅館が建ち並んでいた場所でもある。1868(明治元)年に日本から渡航した「元年者」にはじまる日本からのハワイ移民は1885(明治18)年の第一回官約移民の渡航から本格化する。彼らは飲酒、とばくといった悪習ももたらしたが、一方で日本人独自の社会基盤を形成することになった⁽¹⁴⁾。1890(明治23)年頃には、プランテーション労働の契約が満了を迎えた人々が、転職してホノルルやハワイ島ヒロ市などの都市部へと移る傾向が強かったという⁽¹⁵⁾。1900(明治33)年にペスト患者の一家屋を焼却中に強風にあおられ、日本人が密集していたマウナケア、リバー、スミス、ベレタニアの諸街を全焼したペスト予防焼き払い事件は多くの被害をもたらしたが、一方で、ホノルルの日本人社会が市内各所の日本人町を形成する契機ともなった。各地方の青年男女や実業家、医師、旅館、各種の生産業、サービス業など、さまざまな団体・クラブが組織・創立され、文化・教養を高め、芸能・スポーツの普及につとめたという⁽¹⁷⁾。

1章で述べたとおり、1950年代に日本映画の大手各社は輸出振興策の一環としてホノルルに常設館を獲得した。そのほとんどは、戦前から続く映画館で日本人街のランドマーク的存在でもあった。たとえば、ヌアヌ河畔のカレッジウォークにあった東洋劇場(地図1:3)は、当時の布哇報知が「約十五万ドルの経費と起工依頼七ヶ月の日数を要して落成したもので、堂々たる概観は元より、内部もともに名実伴う豪華な映画の殿堂である。東京の歌舞伎座式の建物にして、(中略)場内に至れば日本座敷の竹の間もあれば又色彩鮮やかに描かれた装飾画など眼を驚かし、観客席の両側は日光東照宮を模して美観を極める⁽¹⁸⁾」と記しているように絢爛豪華な純日本風の建物だった。「東洋劇場は、時代劇と(日本の)ギャング映画のためにある映画館のようだ⁽¹⁹⁾」といわれるほど、東洋劇場は日本映画の醍醐味を伝えるものであった。

木村の長女洋子氏の話によれば、木村は日米

キネマに参加してまもなく、ハワイの支店長となり、松竹映画の輸入及びベレタニア館(地図1:5)の経営を手がけるようになったという。ベレタニア劇場は松竹映画の上映を主としていたが、映画の他大衆演劇、スバルショーのような少女歌劇も上映していた⁽²¹⁾。劇場はダウンタウンにあり、当時“Tin Can Alley”と呼ばれていた細い路地に面していた。このベレタニア館の経営が落ち着いてまもなく1941年の12月7日の日米開戦を迎えたため、木村氏は翌年2月には第一回船で大陸へ抑留された。古屋翠溪の『配所転々』に記された一世の大陸移動者氏名に木村宗雄の名前を見ることができる⁽²²⁾。

米本土へ抑留されても、木村は映画をキャンプの人々に提供する生活を送っていた。古屋によれば、サンタナ州ミゾラの抑留所では、映画部長を務め⁽²³⁾、サンタフェの抑留所では所内でおこなわれていた演劇の脚本部に所属していたという⁽²⁴⁾。

同様に、ヨシエ夫人と洋子氏の話では、木村は日本の抑留所だけではなく、ドイツやイタリアの抑留所で映画上映を行い、日に18セントから20セントを稼いでいたという⁽²⁵⁾。戦前、アメリカ本土で映写と弁士の両方を行っていた木村の本領が発揮されたエピソードだといえるだろう。

4. 戦後の復興と日本映画館の経営

サンタフェの抑留所で終戦を迎えた木村は、まもなくロスアンゼルスへ向かい、日米キネマのフィルムの返還作業に携わった。この時の木村の尽力によって日米キネマは押収されていた約1000本のフィルムを返還することに成功している⁽²⁶⁾。1947年に民間貿易が再開されてからは日本からの輸入も再開され、1948年1月にロスアンゼルスで上映された日米キネマ戦後第一回新作映画『歌麿をめぐる五人の女』(溝口健二監督 1946年 松竹京都作品)を皮切りに、新作映画が次々とハワイでも上映されるようになった⁽²⁸⁾。木村は当時、日活、新東宝、大映の輸入を手がけていた。

1948年9月には、古屋昇、諭、清の兄弟が父で劇場所有者だった古屋理一郎の公園劇場の再開



写真2: 多くの人で賑わう国際劇場 (提供: 木村ヨシエ氏)

に力を貸している⁽³⁰⁾。開業の広告には「吾社が契約している母国映画の雄、松竹、大映、東横、マキノ、東宝、其他製作各社の映画及び日本ニュース、新世界ニュース等を供給して皆様に十分楽しんで戴けることを誇りとします⁽³¹⁾」と書かれており、民間貿易の再開からまもなくして、日米キネマが如何に積極的に映画の輸入交渉を行い、契約を獲得していたかが伺える⁽³²⁾。

続いて木村は1903年以来長年に渡って日本人向けに芝居、浪花節、映画興行が行われたホノルル座(地図1-(1))⁽³³⁾を買取り、1954年の9月にホノルル座を新装開館している。木村は開館の挨拶の中で「私が新派の俳優として初めて舞台上に立ったのがホノルル座で、この度一演藝生活五十年目にホノルル座を手に入れ日本映画封切り館として再発足することになり誠に感慨無量であります⁽³⁴⁾」と述べており、木村自身にとっても非常に思い入れのある劇場であったことが伺える。このホノルル座の開館からまもなくして、それまで国際劇場(地図1-(4))を所有していた藤川喜代一氏の死去と国際劇場の経営を担当していた松尾達郎氏が病に倒れたことも重なり、木村が国際劇場の経営に携わることになった⁽³⁵⁾。さらに1955年3月には、木村を社長として、大映、東宝、新東宝の出資による現地法人「太平洋映画株式会社」が設立されている⁽³⁷⁾。翌年、太平洋映画株式会社を大映の永田雅一が買取り大映の75%現地法人となったことから、国際劇場は以降、大映常設館となった⁽³⁸⁾。

国際劇場は、1941年に開館したホノルル初の日



写真3: 新国際劇場のプログラムと日米キネマのレターヘッド (提供: 木村ヨシエ氏、筆者撮影)

本人完全経営による映画館で、約1000人を収容可能な上1941年当時の最新鋭の設備を備えた大劇場だった。劇場には特注のおおきな大映の提灯が飾られ、正月には封筒にいれたプロマイドを配るなどのサービスで多くの観客が劇場に足を運んだ⁽³⁹⁾。市川雷蔵が「ハワイの人は日系、白系を問わず、チャンバラのファンが多く、時代映画がかかると、いつも満員になるということでした。」と手記に残しているように、ハワイでは現代劇よりも時代劇が人気だったといわれている。洋子氏の話によれば、木村は輸入した映画をあらかじめ1人で試写し、客入りのいい時代劇に現代劇を併映で加えるなど、工夫を凝らしたプログラム編成を行っていたという⁽⁴¹⁾。

5. 芸能人の招聘と日本映画のハワイロケーション

木村宗雄は劇場経営の傍ら、芸能人の招聘にも力を注いでいた。1949年8月に、三浦光子を日本映画スターとして戦後初めてハワイへ招聘して以降、多くの芸能人の招聘、世話に携わった。1950年には、第二次世界大戦で活躍した日系百大隊の記念ホール「クラブ100」の基金募集のため、美空ひばりと川田晴久のハワイ公演の世話をしている⁽⁴²⁾。この時に木村氏によって撮影されたフィルムの一部は『東京キッド』(斉藤寅次郎監督 1950年松竹大船作品)の劇中で使われている⁽⁴⁴⁾。洋子氏の話では、当初、百大隊が直接美空ひばりを招聘しようとしたところ、ひばりはまだ12歳に満たなかったため、交渉が難航していたため、木村の力を借りる

ことになったのだとい⁽⁴⁵⁾う。

1952年に公開されたハワイロケーション映画『ハワイの夜』につづいて、新東宝がハワイロケーションを行った『ハワイ珍道中』(斉藤寅次郎監督 1953年 新東宝作品)は、木村宗雄がロケーションのコーディネートをを行った作品である。ハワイロケ隊は映画ロケ以外にも「新東宝布哇ロケ隊珍藝歌合戦」と題して、江利チエミ、田端義夫⁽⁴⁶⁾による歌、出演者による芝居などの実演を国際劇場で行った他、斉藤寅次郎監督率いる寅さんチームと地元チームとの野球試合など映画さながらの珍道中⁽⁴⁷⁾だったことが伺える。1959年にはハワイ立州記念映画『旅情』(田中重雄監督 1959年 大映作品)のロケが行われた。木村はこのときもハワイロケ一切のコーディネートを手がけ、出演も果たしている。『旅情』のロケ隊も、『ハワイ珍道中』同様に国際劇場のステージに出演し、実演を行い、多くのファンを喜ばせた⁽⁴⁸⁾。

1960年の正月には当時大映の大スターだった市川雷蔵が国際劇場のステージに出演している。ハワイでは木村の世話によって市川雷蔵後援会が作られ、空港の出迎え等々を行っていた。当時の新聞によれば「立州ハワイ祝意を表して大映本社より市川雷蔵が当地を訪問、国際のステージから挨拶を述べ、さらにホノルルファンも待望に答えて雷蔵得意の日本舞踊『まつり』を清元の音曲に合せて贈ることになっている⁽⁴⁹⁾」とあり、雷蔵のハワイ訪問がハワイ立州を記念したものであることがわかる。

6. 国際劇場の移転から日米キネマの解散まで

大映常設館として順調な経営が続いていた国際劇場だったが、1963年に打ち出されたクイ地区再開発計画によって移転を余儀なくされた。このため木村は、太平洋映画会社と大映株式会社との共同出資で、ベレタニア街とヌアヌ街の角に新国際劇場を建設することになった。当時関係者向けに配られた招待状によれば、開館に際して来日した田宮二郎、藤村志保らスター及び永田雅一大映社長との落成式と『座頭市血笑旅』(三隅研次監



写真4:新装開館したホノルル座での木村宗雄、ヨシエ夫妻(提供:木村ヨシエ氏)

督 1964年 大映京都作品)の上映が1964年12月11日に行われている。

1964年12月に開館した新国際劇場は収容人数800人の中規模の劇場であったが1971年に大映が倒産。フィルムの輸入が一気に減少しながらも、ストックフィルムによる再上映を行っていたが、1973年12月に中国系のマンダリン劇場会社⁽⁵⁰⁾に買収され、閉館することになった。これが、事実上の太平洋株式会社⁽⁵¹⁾の解散となった。新国際劇場を閉館した後も、1976年の解散まで、木村家ではハワイ日米キネマとして米本土向けに大映映画のフィルムの輸入業を続けていたという。新国際劇場の閉館から3年後の1976年に90歳を迎えた木村は遂に引退を決意した。1976年6月9日号のハワイ報知には感謝と題された木村の引退のことばが以下のように述べられている。「私議七十年の長年月に亘り、芸能で、映画で、皆様方のお引き立てにあづかりましたが、九十歳の高齢を迎えましたので、完全引退の決意をいたしました。今回の引退に際し、今日までお引き立てくださいました知友各位に心から感謝の意を表します。アロハ」。

7. ホノルルにおける戦後日本映画文化の発展

木村宗雄の約80年の演芸生活は、そのままハワイ芸能史にあてはまる。青年時代は役者・弁士としてハワイから米大陸へと駆けめぐり、50歳を過ぎてからはその豊富な経験によって接收されていたフィ



写真5: 藍綬褒章を受勲した当時の木村宗雄(提供: 木村ヨシエ氏)

ルムの返還、日本からの芸能人の招聘を推進していった。このことは、1世の時代にプランテーションの巡回興行から始まった日本映画上映が、戦後ハワイ日系社会のエンタテインメント文化として定着する大きな原動力となっていった。

ハワイの映画上映は、単にフィルム上映を行うだけではなく、ローカル楽団による演奏、のど自慢など、実演を交えての上映会が多かったのも特徴のひとつだろう。特に実演を交えた上映が盛んだったのが、終戦から映画輸入再開までの1946年から1949年頃までで、映画とステージショー、芸人のど自慢などがさかんに行われていた。⁽⁵²⁾

1950年代に入ってから、日本映画は日系人以外のローカル層にも親しまれるようになった。その大きな要因は輸入映画に英語字幕をつけるようになったことである。田坂によれば、ハワイの日本映画に初めて英語字幕がつけられたのは、『東京物語』(小河安二郎監督 1954年 松竹作品)であり、⁽⁵³⁾これをきっかけにハワイの日本映画は日本語が得意ではない日系2世、3世の他ハワイに住む他人

種へも受け入れられることになり、さらに、1958年頃からストーリーが単純な善悪のはっきりした東映時代劇が人気を集め、日本映画のファンが増えたといわれている。⁽⁵⁴⁾また、ダウントウンに集中して映画館が建ち並んでいたことは、日本映画常設館に追い風をもたらしていた。当時、ダウントウンにはリバー近くの国際劇場、東洋劇場の他、アアラ公園にあった日本劇場、木村が経営していたアジア劇場(ホノルル座)など常に4軒から5軒の映画館が異なるプログラムを上映していた。多くの日系人が、1950年代から60年代当時、ホノルルに住む日系人の多くは、休日になると映画館でマチネー上映を鑑賞し、近くでお茶や食事を楽しんだ後、数百メートルほど離れた別の映画館で映画を見て過ごしていたと当時を回想している。

8. 失われた日本人街と映画文化

ハワイから日本映画館が失われた理由は、都市計画による映画館の移転、日本映画作品の変化、輸出量の減少であると考えられる。

1964年のダウントウンの改善計画は、1950年代に全盛期を迎えた日系コミュニティのエンタテインメント文化と生活スタイルを変化させた。結果的に改善計画の対象に加えられた木村経営の国際劇場、またアアラ公園にあった古屋兄弟経営の日本劇場はそれぞれ別の場所へ移転せざる得なくなり、同時に観客を大きく分散させる契機にもなった。改善計画の対象となったのは当然映画館だけでなく、レストラン、商店も含まれており、ダウントウン地区に集中して住んでいた多くの日系人が他の地域へ転居することになった。

このような都市計画の波はホノルルの日本人街を消滅させる契機にもなった。古くからあった旅館はコンドミニアムへと変貌し、映画館があったアアラ公園の周辺も、今はアパートが建ち並んでいる。

「消えてなくなるとはアアラ不思議やいぶかしやというのが「アアラ街」の運命である。街名は一部分だけでも残るかも知れないし全然なくなるかも知れないが悲しい話。元来がキング街からベレタニア

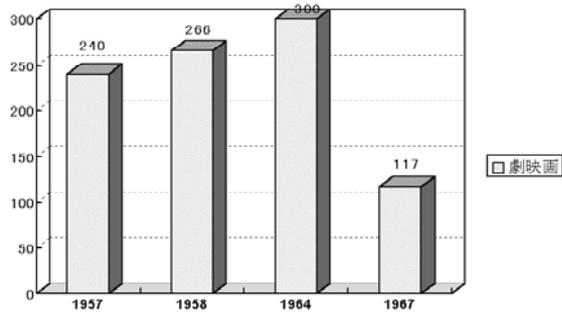


表2: 戦後日本映画の輸出数(ハワイ、米本土)
参考: “JAPANESE FILMS” Uni Japan(日本映画海外普及協会), 1956-1969

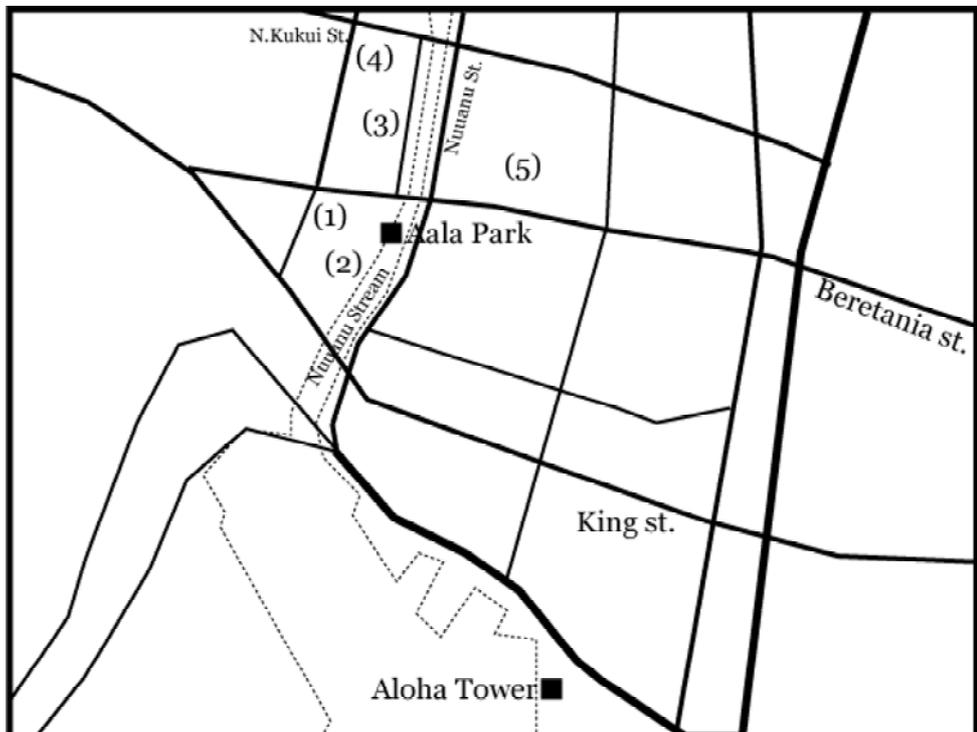
街に至る短いワン・ブロックだが、日本人には忘れられない歴史の足跡が残っている街の一つであったのだから、これから育つ三世四世には語り伝えて欲しいものである」と本田緑川が手記に残しているように、日本人街を形成してきたアアラ街を含め、ダウンタウンの日本人街は都市計画によって全くその姿を変えてしまった。

ドロレス・ハイデンが「記念碑的な建築と同様、集会所、学校、住宅といった一般的な都市の場所も、視覚的かつ、社会的な記憶を喚起するだけの力を有しているだけにもかかわらず、公共の記憶にとつての普通の建物の

重要性はほとんど無視されてきた」と述べている通り、ホノルルの日本人街はかつてのホノルルの中心的な都市機能を有していたにもかかわらず、その姿を消すこととなった。しかしながら一方で、1900年代の初頭から形成されてきた日本人街は都市開発がはじまった1950年代にはすでに老朽化が進んでいたことも事実である。

ハワイで日本映画が低迷した一番の理由はテレビの台頭と日本映画の低迷だったといわれている。その中でも大きな理由は、1960年代から70年代にかけて、日本映画がハワイ人好みの時代映画からやくざ映画へと切り替わっていったことだろう。4章で述べたとおり、ハワイで人気を博したのはチャンバラ映画—時代映画だった。その一方で、時代映画が減り、やくざ映画、ポルノ映画へと送られてくるフィルムが増えていく中でも、国際劇場はストックフィルムの時代映画との併映で経営を乗り切っていたという。このような状況の中で、木村にとって一番の痛手だったのは大映の倒産だった。洋子氏は新国際劇場の閉館理由は、大映の倒産によってフィルムの輸入が極端に減ったことが理由だと語っている⁽⁵⁸⁾。洋子氏が語るとおり、戦後日本映画のハワイ、アメリカ本土への輸出量は表2に示している通り、1964年をピークに激減している。

新国際劇場の閉館時の1973年には、木村はすでに87歳の高齢であった。それは木村たち1世が日本とハワイを結んで培ってきた日系文化のひとつの区切りであったのかもしれない。



(1)ホノルル座(2)日本劇場(3)東洋劇場(4)国際劇場(5)ベレタニア館
地図1: ホノルルダウンタウン地区にあった主な日本映画館

9. おわりに

「私のお父さんはね、ハワイに2, 3回きて。遊んで。(ハワイに)帰って、京都行って、役者の勉強に行きました」という洋子氏の証言から、木村宗雄は、その若き日にハワイのプランテーション耕地で働いたお金で京都とハワイを往復し役者修業をしていたことがわかる。その後米本土で新劇の幹部役者として活躍したといわれている木村だが、そこには京都での役者修業の経験が活かされていたのかもしれない。

木村の多彩な活躍については、この京都での生活を含め、戦前の日米キネマでの活動の様子、米本土での抑留生活の様子など、まだ多くの不明な点が残されている。戦後大映の常設館であったことや永田梅一、川口松太郎らとの交流なども、木村の業績の背景に、京都を中心とする日本の演劇、映画界との深い関わりがあったことは間違いないだろう。同時に「たとえば私が公演した国際劇場の社長の木村さんなどは、ハワイに五十年も住んでいながら、戸籍はいまだに山口県の岩国にあるだけに、ハワイ居住権は持っていても、合衆国市民権を取っていないという日本主義者でした」と市川雷蔵の手記にもあるとおり、生涯の大半をアメリカで過ごしたにもかかわらず、生涯英語を話すことはなく、すべて日本語で、日本人として生き抜いた人物でもあった。

1973年に閉館となった新国際劇場は、建物はいままも現存しており、現在は教会として使われている。筆者らは、このように建物や資料等から導き出す日系人の「都市の記憶」の保存と継承を行う試みについても調査研究を進めており、詳細は別稿で論じているとおりである。同様に、木村をはじめとする一世の活躍によって確立されてきたホノルルのエンタテインメント文化を含む日本人街の形成についてはさらに研究・調査を深めいづれ稿を改めたい。

付記 本稿では、2003年8月6日、17日にホノルルにて行った Mrs. Esther Yoshie Kimura, Mrs.

Edna Yoko Kijinami, Mr. Gilbert Kimuraへのインタビュー内容を中心に構成した。インタビューに際しては、林達巳氏に多大なご尽力を賜った。

ホノルルでの調査中多くの助言をいただいたジャック Y. 田坂氏、鈴木啓氏。本稿の執筆にあたって多くのご助力をいただいたハワイ日本文化センターのボランティア各氏、ハワイ大学マノア校の竹田浩二先生、また本稿に先駆け2003年11月1日に日系研究会において報告の機会を与えてくださった本学法学部の山本岩夫先生。本稿の限られた紙面では掲載できないが、協力いただいたすべての方々に記して感謝の意を表したい。

注

- (1) ハワイ日本人移民史刊行委員会[編]『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会、1964年、519頁。
- (2) ジャック.Y.田坂「思い出の写真で綴る古き良き時代のホノルルの劇場と映画館」イーストウエストジャーナル、2003年8月15日号、20面。
- (3) 本田緑川「活動写真弁士の元祖」『さよなら電車』博文堂、1974年、66頁。
- (4) 岩本憲児、牧野守[監修]「映画年鑑戦後編 1955年度版」日本図書センター、149頁。
- (5) 通商産業省企業局商務課(編)『映画産業白書』尚文堂出版部、1963年、118-119頁。
- (6) 通商産業省企業局商務課[編]『映画産業白書』大蔵省造幣局、1959年、38頁。
- (7) 『ハワイ報知』1985年5月11日号。
- (8) 沢村作市は1882年(明治15年)に広島県で生まれ、1906年にハワイに渡航。菓子店、雑貨商店を経営した後に1910年(明治43年)頃から活動写真興行に関係し大正元年には活動写真業者をなる傍ら、フィルム輸入を開始し、ステート劇場、ホノルル座を経営していた。(『布哇日本人銘鑑』布哇日本人銘鑑刊行会、1927年) 沢村はマキノ映画のエージェントだったといわれており、娘婿の御旗義登もしばしば京都にあった日活の撮影所に姿をみせている。(詳細は小川正『マッ

- カーサーとチャンバラとある活動屋の思い出話』恒文社 1995年を参照のこと。)御旗義登はCIEの映画検閲官だったウォルター御旗と同一人物であるが、戦後の『映画年鑑』に沢村商会の東京支社長として沢村作市の名前が見られる。御旗は検閲官の傍ら、ハワイへの日本映画の輸出も行っていたものと思われる。
- (9) 記述は木村宗雄自筆の履歴書に依るもの。
- (10) 『羅府新報』昭和5年9月30日号4面などに木村宗雄が弁士を担当した広告を見ることができる。
- (11) 『布哇報知』1964年11月2日号。
- (12) 『ハワイ報知』1984年6月1日号。
- (13) 岩本憲児、牧野守[監修]『映画年鑑 昭和編 I ⑧ 昭和16年版』日本図書センター、1994年、付録。
- (14) 前掲書『ハワイ日本人移民史』266頁。
- (15) 同上書、266頁。
- (16) 日布時事社[編]『昭和十六年日布時事布哇年鑑 附日本人住所録』日布時事社、1941年、157頁。
- (17) ジャック・Y・田坂[著]『日本人官約移民100年祭記念 ハワイ文化芸能100年史』イーストウエストジャーナル社、1985年、24頁。
- (18) 『布哇報知』1938年6月15日号。
- (19) De Francis, John. "Things Japanese in Hawaii" Honolulu, University Press of Hawaii(1973), pp.142. 邦訳。
- (20) Interview with Mrs. Yoshie Kimura, Mr. Gilbert Kimura, and Mrs. Edna Kijinami
Aug 6 2003
- (21) スパルショーはハワイ、米本土で弁士、興行師として活躍した河合太洋が創設した少女歌劇で、1940年当時各地で絶大な人気を誇っていた。(田坂養民「移民百話」『イーストウエストジャーナル』1985年10月1日号)
- (22) 古屋翠溪[著]『配所転々』布哇タイムス社、1964年、439頁。
- (23) 同上書 265頁。
- (24) 同上書、294頁。
- (25) Interview with Mrs. Yoshie Kimura, Mr. Gilbert Kimura, and Mrs. Edna Kijinami
Aug 6 2003
- (26) 『布哇報知』1946年10月19日号。
- (27) 『映画年鑑』によれば、日本映画の輸出が復活してまもなく、日米キネマの熊本俊典社長が訪日しており、おそらくこの同時期か前後に、木村も夫人とともに日本へフィルム輸入の交渉にあたったものと思われる。(岩本憲児、牧野守[監修]『映画年鑑 戦後編⑩1950年版』日本図書センター、1994年、49頁。)
- (28) 『羅府新報』1948年1月1日号。紙面には「七年振りに海を渡った新映画」「日頃のご愛顧に報ゆるため率先渡日して厳選した全米最初の新封切映画」と広告が掲載され、戦後日本映画復興の期待が強くこめられている。
- (29) 古屋昇(1920-2002)は日本劇場の経営の他、資生堂ハワイの社長、ラジオ放送局KZOO社長なども務めた。木村同様、日本とハワイとの交流を発展させた人物である。
(Honolulu Starbulletin <http://starbulletin.com/2002/02/04/news/story8.html>)
- (30) 前掲「思い出の写真で綴る古き良き時代のホノルルの劇場と映画館」24面。
- (31) 『布哇報知』1948年9月30日号。
- (32) 1954年に日本劇場は松竹常設館となり、以降1981年の閉館まで、松竹映画の上映の他、スターの招聘、ロケーションのサポート等を行った(『布哇報知』1981年1月5日号)。
- (33) 前掲「思い出の写真で綴る古き良き時代のホノルルの劇場と映画館」20-21面。
- (34) 『ハワイタイムス』 1954年9月3日号。
- (35) 前掲「思い出の写真で綴る古き良き時代のホノルルの劇場と映画館」24面。
- (36) 一方で、ホノルル座は、同じ会社の経営で、近くにある2つの映画館が競合することになったことにダウンタウンの再開発が重なり数年後に取り壊された。
- (37) 『布哇報知』1955年3月4日号。
- (38) 『布哇報知』1965年3月10日号。
- (39) Interview with Mrs. Yoshie Kimura and Mrs.

- Edna Kijinami, Aug 17 2003.
- (40) 市川 雷蔵『雷蔵、雷蔵を語る』朝日新聞社、2003年、138頁。
- (41) Interview with Mrs. Yoshie Kimura and Mrs. Edna Kijinami Aug 17 2003.
- (42) 『布哇報知』1949年8月25日号。
- (43) 橋本治、岡村和恵[著]『川田晴久と美空ひばり -アメリカ公演』中央公論新社、2003年、23頁。本文中には木村の名前は出てこないが、写真の中に木村の姿をみることができる。
- (44) Interview with Mrs. Yoshie Kimura, Mr. Gilbert Kimura, and Mrs. Edna Kijinami Aug 6 2003
- (45) 同上。
- (46) 『布哇報知』1954年6月25日号。
- (47) 『ハワイタイムス』1954年6月26日号。
- (48) 『ハワイタイムス』1959年10月5日号。
- (49) 『布哇報知』1960年1月1日号。
- (50) 『布哇報知』1973年12月12日号。
- (51) Interview with Mrs. Yoshie Kimura and Mrs. Edna Kijinami Aug 17 2003
- (52) 例えば下記広告のようなプログラム「明サンデーより一週間上映一日活超特作 荒熊大八 主演……雲井龍之助……他幹部総動員 弁士 三富粹月」とありさらに余興として「独唱と舞踊 クラブ二世、居合術……古屋新三 奇術界の大家 石田天海一行」(『布哇報知』1946年10月26日付2面)。
- (53) 前掲「思い出の写真で綴る古き良き時代のホノルルの劇場と映画館」24面。
- (54) 前掲書 ハワイ日本人移民史 521頁。
- (55) 日本劇場はアアラ地区再開発のため、元のパレス劇場(ベレタニア街とケアモク街の角)をリース、改装して「新日本劇場」を1965年1月1日に開館させたが、1980年末に劇場のリースが切れたことも重なって閉館することとなった(『布哇報知』1981年1月5日号)。
- (56) 前掲書『さよなら電車』54頁。
- (57) ドロレス・ハイデン[著]後藤春彦、篠田裕見、佐藤俊郎(訳)『場所の力 パブリックヒストリーとしての都市景観』学芸出版社、2002年、72-73頁。
- (58) Interview with Mrs. Yoshie Kimura and Mrs. Edna Kijinami Aug 17 2003.
- (59) Interview with Mrs. Yoshie Kimura, Mr. Gilbert Kimura, and Mrs. Edna Kijinami Aug 6 2003
- (60) 前掲書『雷蔵、雷蔵を語る』149頁。
- (61) 権藤千恵、大野晋、稲葉光行『都市の記憶の共有プラットフォームとしてのナレッジブルアーカイブーハワイ州における日系人文化の保存と継承の取り組みについてー』アートリサーチvol.3, 2003年3月。